

佐多稲子のフェミニズム

野本, 泰子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/8352>

出版情報 : 九大日文. 1, pp.189-201, 2002-07-25. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン :
権利関係 :

佐多稲子のフェミニズム

NOMOTO YASUKO
野本 泰子

1

本稿は、佐多稲子の評論集によるフェミニズム批評への試みである。本稿が対象とする佐多稲子の評論集は、フェミニズムの始点以前ということの一つの目安として、一九七〇年以前に発刊された評論集であり、本稿はそれを中心として佐多稲子独自のフェミニズムのあり方を探求する。評論集は、『一婦人作家の随想』（現代社、一九三四年）、『女性の言葉』（高山書院、一九四〇年）、『季節の随筆』（万里閣、一九四一年）、『日々の伴侶』（時代社、一九四一年）、『続・女性の言葉』（高山書院、一九四二年）、『女性と文学』（美業之日本社、一九四三年）、『智恵の輪』（現代社、一九五六年）、『女の一生』（酒井書店、一九五六年）、『罪づくり』（現代社、一九五七年）、『働く女性の生き方』（知性社、一九五九年）、『女茶わん』（三月書房、一九六三年）、『生きるということ』（文芸春秋新社、一九六五年）、『ひとり歩き』（三月書房、一九六九年）、である。ところで、『佐多稲子全集』（全十八巻、一九七七年～一九七九年、講談社、以下『佐多稲子全集』は『全

集』と記す。)の編集委員の一人である大江健三郎は、佐多稲子を日本の近代・現代のフェミニズムの系譜の中で、その「高い頂」と位置づけている(『小説の経験』、一三九頁)。また、佐多稲子自身、「私ほど、女、女ということを作家の立場から言ったものは少ないように思う。」(「怖ろしき矛盾」、『全集第十六巻』、四〇〇頁)と語っている。そこで本稿は、佐多稲子のフェミニズムとは何かをあらためて分析する試みである。フェミニズムの立場から佐多稲子の評論集を論じた先行論文としては、長谷川啓の「女性文学にみる抵抗のかたち(左翼系作家)の父権制とのたたかい」(『転向』の明暗)、および、「佐多稲子とフェミニズム」(『群れ翔ぶ—佐多稲子追悼集』)がある。本稿は、長谷川論文と同じく佐多稲子をフェミニズムの視点で論じるのであるが、本稿なりに視点をずらし、また、長谷川論の光が当たっていない部分をも論じることを心掛けた。本稿なりの視点とは、本稿がフェミニズム批評を念頭に置いているということ、および、佐多の主要なるアイデンティティを「女」・「女性作家」とみて論じるところにある。アイデンティティに注目するのは、佐多がリアリズムの作家として、自己のアイデンティティを凝視するところから出発し、終始一貫してリアリズムの作家でありつづけたと思うからである。勿論、「女」、「女性作家」と分けて論じるからといって、両者の間に一線が引けるわけではない。佐多の発言がいずれのアイデンティティに属するか判断に迷うこともあり得る。それは承知の上で、本稿はこのような視点から論じることが、佐多稲子のフェミニズムを探求するには有効と考える。2においては、佐多の「女」というアイデンティティからなされるとみられる発言に注

目して、佐多のフェミニズムを探求する。3では、「女性作家」というアイデンティティに重きを置いて佐多のフェミニズムの特徴を調べる。

2

本論に入る前に、論中に頻出するフェミニズム、フェミニズム批評、ジェンダーについて、ここであらかじめ若干の説明を加えておきたい。海外の第二波フェミニズムの流れをみれば、その起点は、ベティ・フリーダンの『新しい女性の創造』が発刊された一九六三年にまで遡る。また、フェミニズム批評の重要な試みとして高く評価されるケイト・ミレットの『性の政治学』が発刊されたのは一九七〇年である。一方日本はといえば、日本の第二波フェミニズムは、欧米のフェミニズムの影響の下に七〇年代に産声を上げ、学問としての女性学を創出していく。江原由美子は、「女性・フェミニズム」という研究領域が生まれてきた七十年代末から今日までの動向を、大きく「女性学創出期（一九七〇年代末から一九八〇年代前半）、フェミニズム理論導入期（一九八〇年代半ばから一九八〇年代末）、ジェンダー研究創出期（一九九〇年代）という三期に区分」（『フェミニズムのパラドックス』、一四頁）している。フェミニズムにとって、「生物学的性別」と区別される「文化的・社会的・心理学的」性別を意味する（同上、二九頁）ジェンダー概念の導入は画期的なことであった。というのは（ジェンダーという概念を導入することは、「性別」に

関わる社会現象は、「生物学的性別」とは区別される「歴史的社会的文化的性別」によっても同じぐらい大きく規定されており、それゆえそれは、社会変革によって大きく変更することが可能なのだと主張することに等しいのである（同上、三五頁）から。しかし、ジェンダー概念の導入は「両刃の剣」であるといわれる。ジェンダーには「中立的で客観的な響き」があり、フェミニズムの「告発的形態を中和させ、その闘争的側面に違和感を持っていった女性たちや男性たちを、フェミニズム言説の中へと巻き込んでいく」（大越愛子、「フェミニズム入門」、一六五頁）ものであるものの、ジェンダーは、「本来必要なのは不平や権力についての言説」（ジョーン・W・スコット、『ジェンダーと歴史学』、五九頁）をともなっていないと指摘される。今世界的なフェミニズムのフロンティアで起こっていることは、『ジェンダー・トラブル』におけるように、〈明確に区分された男女の各項のなかでジェンダー、セクシュアリティ（欲望）、セックスが矛盾なく繋がっていると考える「首尾一貫した」アイデンティティの論理〉（竹村和子、『ジェンダー・トラブル』訳者解説）に批判的な問題提起がなされ、また、イリガライにおける、「女の本質というものには存在しない。なぜなら女は逸らし、かつ自分自身から逸れてゆくからである。」（『一つではない女の性』）という言葉に表される「脱構築」への接近である。このような記号論的、二項対立の世界観から脱構築へのポスト・モダンな動きは、フェミニズム・フェミニズム批評・ジェンダー概念に共通してみられる動きである。フェミニズム批評の歴史においても三つの段階が指摘される。第一段階は、女の視点による男性作家の作品の読み直しで

あり、第二段階では、埋もれていた女性作家の作品の発掘作業が行われ、これはフェミニスト・クリティックであるエレイン・シヨウウォーターによって「ガインクリティック」(GYNOCRITICS)と命名された。「ガインクリティック」は、「優位に立つ物語」(筆者：男の物語)と「無言化された物語」(筆者：女の物語)の二重の声を含む言説としての女性のテキストにおいて、そこに作動しているジェンダー権力システムを読み解く、挑発的なテキスト解体実践」(大越愛子、二二三頁)である。第三段階のフェミニズム批評理論は、「西洋近代二元論形而上学の解体をめざす文化批評理論」(同上)であり、アリス・ジャードンによって「ガイネーシス」と命名された。

日本のフェミニズム批評の先駆的な試みとしては、「青鞥」の女性論者によるものがあるが、その後に来るものとして注目すべきは、宮本百合子の『婦人と文学』と、佐多稲子の『女性と文学』他の評論集である。佐多の一九三〇年代から書かれたそれらの評論集には、佐多のフェミニズムの原形が示されている。これについて長谷川啓は、「(産む産まぬは女の自由)」という『産の自己決定権』についての佐多の視点は、一九三〇年代に佐多稲子自身がすでに獲得していたもの」(『群れ翔ぶ―佐多稲子追悼集』、一四頁)であることを述べている。長谷川啓はさらに『女性の言葉』には、「女性の問題がぎつしり語られ、佐多稲子の戦前のフェミニズム意識がうかがえ」、「戦後のフェミニズム思想の核にもなっているもの」であることを指摘し、「この当時から佐多稲子は「男が主体となつてゐる世の中」という認識をはっきりと持つていたと述べている。本稿は、佐多のフェミニズムが女性の視点を

一つの拠とするけれど、女性の視点に捕らわれることなく常に視点は両性に及び、絶えず両性関係のあり方を念頭に置いた、中立的で、両性志向的などところにその特徴を見るのである。いわばジェンダー的で男女双方に対する実質的平等観にたつフェミニズムであるともいえよう。「実質的平等」という言葉は憲法解釈において「形式的平等」との対比で用いられるが、「実質的平等」は、性において「歴史的差異」が存在する限りにおいて、「有利な側にハンディをつけ、不利な側にプラスをし、実質的に平等な立場に置」(『現代の法Ⅱジェンダーと法』、八八頁)くことを平等とする考え方である。それでは実質的平等観にたつ佐多のフェミニズムの詳細な探求と証明に移ろう。佐多の視点が男女の双方に向けられ、実質的に偏することがないのは、佐多が、男女の関係性において初めて理想的な形が得られると考えるからである。まず、『女性の言葉』で恋愛についてその考えが示されている。「恋愛の相手の影響は決して、女性側だけのものではなくて、男性にとつても大きな作用を持つのである」(『女性の言葉』、四四頁、本稿では旧仮名遣いと旧漢字は適宜新仮名遣いと新漢字になおす。)さらに、佐多の両性関係重視の考え方をその前後に詳しく見てみよう。佐多は女性にハンディのある現実をしっかりと捉えていることが分かる。「女性は今日ではその結ばれる相手によって、ある程度の方向を決められてしまうことは勿論男性が女性によって境遇を決定されるということよりはずっと大きいのである。それは、男性が社会的に生活し、女性が非社会的な生活をさせられている、ということに原因している」(四五頁)という。そこから佐多の視点は男女双方に向けられ、性差のある女性の現実には女性にとつ

ての不幸であるばかりでなく、男性にとつても不幸になることを次のように述べている。「今日、女性の多くが経済力を持たず、また結婚をすれば大抵家庭に入ってしまった」（四四頁）うことにより、女性は「家庭内の限られた生活感情の狭さや小ささや低さをもつて、その共同の相手である男へ影響し、男自身をも女の低下したレベルへ牽引するということになるのである。目の前ばかりの小利口さや、発展のない小さな幸福に男をとどめてしまうことが、女性の力によって案外大きな結果をもたらされているのを私たちは見ることが出来る」（四四頁）。さらに男女の力関係についての具体的な佐多の観察が次のように続く。

つまり、男は、世間を知らず、夫をだけ頼り、あんまり摩擦のない女を欲する気持が伝統の中でやしなわれているために、女をそのような生活に強いるのである。すると、女はやがて家庭という小さな城砦の中で自分の経験を積み、ある権力をやしない、ひとつの影響力を及ぼす強さを持つようになるのである。（『女性の言葉』、四四、四五頁）

男女の関係性に理想を求めるといふ佐多の思考の流れは、一九六九年発刊の『あとに生きる者へ』においても変わることがない。佐多は「若い人たち」へのその本で、「恋愛が相互を高め合うものであるとき、一番その恋愛は美しい。」（一一七頁）と語りかけている。これらの言葉は恋愛至上主義を唱った厨川白村の恋愛観でもある。長谷川啓は『女性の言葉』時点の佐多に言及して、「恋愛や結婚については、男女平等・相互扶助を前提とする近代

的な対関係、共稼ぎによる一夫一婦制を理想とし」、「まだその幻想を突き崩してはいない」（『群れ翔ぶ—佐多稻子追悼集』、一七頁）と述べている。佐多の白村的な恋愛観に、一九七〇以前の評論集を見る限りでは変化はない。今回分析の対象にした評論集に、佐多は愛情に関する多くの言葉を残している。愛情の始まりから終わりまでその責任は男女が平等に持つものであることを佐多は次のように述べている。

おたがいによき人を求めあうことは当然なことなのだろう。それならおたがいはそれにこたえあわねばならない。（中略）それはもう男も女も共通のものであろう。（『生きる』ということ、『一〇二頁』）

対等に生きる夫婦の間にも、一方の愛情の冷却もある。それは冷却した方が悪かったのか、させた方に罪があるのか、なかなか微妙である。（『あとに生きる者へ』、四三頁）

さらに女性の生き方について、「まったくみじめなことに、これまで女性は、男性ばかりに責任を問うてきた。（中略）もうここでは今までのように被害者の立場で見るのをやめよう。」（同上、一二二〜一二三頁）とまで言っている。性差に目を向け、女性の視点を強調するフェミニズムの立場からすれば思い切った発言とも取れる言葉であるが、これは、女性の視点に捕らわれない佐多のフェミニズムならではの言葉であろう。評論集に現れる佐多のメッセージは、時に通俗的と見過ごされるかも知れないが、

むしろそこにこそ今まで女性が語ってこなかったことにふれる佐多の人生に対する深い洞察が示されていると言えよう。「女の無意識な欲情」という項では、「人間というものは、女性さえその心の中でどんなことでもおもいめぐらす。そして男性には、それを実際に行い得るという条件があるだけである。」(同上、三六頁)と、女と性欲は無縁なものというつくられた神話を否定する。また一方では、女性への手厳しい言葉もある。「揺れるということの甘美さ(中略)自分をあざむく女のずるさは、女は弱い、ということをふりかざす女だ。」(同上、一二三〜一二四頁)というように。誘惑について語られた「女自身も男を誘っている。だから男と女の関係で、五分と五分のこの立場は、本当は今に始まったことではない。女自身がそれを認めてこなかったまでのこと。(中略)今日、危険な男たちにとって、女が対等になったということは、彼の身軽さになった。(中略)今や、法律からも女からも解放されて、」(同上、一二七〜一二八頁)という言葉は、男女の双方に対して痛烈である。以上、「愛情」という項に属する佐多のメッセージを検討してみたが、他の項目についても佐多のバランスのとれた思考のあり方は特徴的である。「徴兵」、「共働き」、「家庭」等を男女の両性に関わることとして両性への平等な視点が認められるだけでなく、女性同志・男性同志という同性間の「友情」についても平等なバランス感覚が示される。「友情は、決して一方の憧憬の中にはない。」(同上、一四一頁)という言葉が示すように。この相互の関係性で事態を把握する思考の流れと方法を佐多はどこで獲得したのか。この点については後に検討する。ここではさらに佐多のフェミニズムのあり方への探求

を続けよう。佐多の女性開放論の特徴として指摘できる男女両性への偏らない視点と、男女の関係性において理想の形を模索する姿勢は、二項対立的で中立的なジェンダーの概念に通じると同時に、解体的でもある。現在のフェミニズムの到達点が脱構築的側面をもつことを考えあわせると、佐多のフェミニズムの新しさ・可能性を示唆する。また特に、一九九〇年代に導入され、フェミニズムにとっての一つの鍵とも見られるジェンダー概念に佐多のフェミニズムが通じるものがあるとするれば、佐多のフェミニズムは、フェミニズムの問題解決へのさらなる可能性を示唆するものと考えられる。ところで、現実をジェンダー概念の許に把握することは、現段階においてさえ古いジェンダー観から完全に解放されているわけではないから、理想の形を描き求める一方で、従来のジェンダー観を引きずる姿を暴露することにもなる。佐多においてもそれが見られる。一つの例は、「キヤラメル工場から」を発表した当時の佐多のジェンダー観である。

それ(筆者注:「キヤラメル工場から」が新聞に小さくながら取り上げられ、いささかほめてあった。「作者は女名前だが、しっかりした調子は、男にちがいない」というようなことで、それを私はほめ言葉と受けとった。『ひとり歩き』、一九六九年、一七六頁)

男の作者に間違われたことを軽く受け流して、何ら問題としない様子には、佐多の「女らしさ」・「男らしさ」という男女の性差を内面化していることの一端が示されている。二つめの例とし

ては、「女のおしゃべり」について述べられた「女は人前でしゃべるべからず、という古いしつけを自分にも課してきた私だから」（『全集第一六巻』、四三四頁）という語句、および、「これまで女はおしゃべりだとされながら、本当のことはしゃべっていないかったのである。」（同上、二五四頁）という言葉である。この「女らしさ」のしつけを内面化した佐多と、それを指摘するもう一人の佐多を浮き彫りにする佐多のメッセージは、「女の沈黙」と「女はおしゃべりであるという誤解」を指摘するフェミニズムの分析に通じる。女はおしゃべりだと見られているけれど本当はしゃべっていないという観察は、フェミニズムを言語の問題で語るD・スペンダーの言葉を想起させる。スペンダーによれば、「社会全体として、話す権利は男にある、と仮定されているとすれば、女は、少しでも話せばしゃべりすぎに見えてしま」（『ことばは男が支配する 言語と性差』、二頁）うのであるが、スペンダーのこの本での論旨は、「男が言語を支配している、したがって言語は男に都合がいいように働く」ということである。「女にとつての言語とは何か」というフェミニズムの言語的なアプローチは、「女にとつての文学」と並んでそれぞれ別個に論じられるテーマではあるが、本稿では省略する。本論に戻るが、佐多の評論集にあらわれる女の視点を検討すると、それは男の視点に對置されるものと捉えられ、次に、女・男の関係性へと論が進む。このような佐多の女の把握のしかたは、フェミニズムの視点に立つと同時に、さらに進んだジェンダー的な把握方法と言えよう。

3

ここでは佐多のフェミニズムを探求するために、佐多の女性作家としてのアイデンティティから派生するフェミニズムの項目を二つ挙げる。一 女性作家における二重意識について、二 佐多の女性作家観について、である。小林裕子は佐多における意識の二重性を、モラルの二重性として指摘している。小林はこの二重の意識の原因を、佐多の少女期における境遇の激変にあるとみて、「若い日の佐多は、世間から見られている自分と、密かに内面で育てているもう一人の自分という、二重の像を抱えて生きていくことになる。」（『佐多稲子―体験と時間』、六七頁）として、さらに、「この実直な庶民の顔と、芸術と倫理の合一を求める文学者の魂という佐多の二重性は、その後の佐多文学を規定する太い枠組みとなった。」（同上、六九頁）と述べている。小林論はフェミニズムの視点を導入しての分析に至っていないが、本稿は、女性作家にみられる二重意識の問題としてフェミニズムの立場から論じてみたい。

フェミニズム批評は女が男の作家のテクストを読むとき経験する二重の意識を取り上げる。二重の意識は、読者となった女に起こる現象であると共に、男の文化を内面化した女性作家に強く意識される現象である。フェミニズム批評は文学理論の読書行為論に、女として読むことと書くことの可能性を求めることができる。織田元子の『フェミニズム批評 理論化をめざして』はその試み

の一例である。織田のフェミニズム分析によると、織田はスタンリー・フィッシュ、ヴォルフガング・イーザー、社会学者マックス・ウェーバーにフェミニズム批評への可能性の一端と限界を引き出している。織田の分析によれば、「解釈共同体」という概念をもちだすフィッシュの理論は、「フェミニストによるテキスト解釈の正当性を主張するための理論的足場を用意してくれる」(八五頁)ものの、「フィッシュ的読者においては、読者自身の学習や自己変革によって解釈の変わってくる余地がない」(九二頁)点を、「読書行為における主体の分裂という現象をこそ主張してきたフェミニズム批評が割り込む余地はない」と斥ける。さらに「内包された読者」という読者中心の見方によるイーザーの理論については、「読書体験を未知なものとの出会いと学習のプロセスとして捉え、そこから積極的な意味を汲み出そうとする」(九二頁)点を「フェミニズム批評を正式に容認する余地を持つ理論」(九三頁)と評価するものの、イーザーの「現実の補完性(または否定性)」の理論は問題ありとする。「現実の補完性」の理論について織田はイーザーから、「読者は否定によって指示されている主題を発見すると、その発見を自己の慣習にフィードバックせざるをえなくなるために、いわば第二の否定を自ら行うことになる。この点をとらえて、文学の価値基準とすることができのではなからうか(イーザー、三七五―三七六頁)」(九九頁)という箇所を引用して、それに次のような説明を加えている。(イーザーは文学には二通りの否定があるという。第一は、テキストそのものが現実界に対してもつ補完作用による否定。第二は、読者が第一の否定に気づくことによって、「自己の慣習にフィード

バックせざるをえなくなる」ことで起こる読者と現実との関係における否定。そしてイーザーは、第二の否定が大きければ大きいほど優れた文学なのだと考える」(九九、一〇〇頁)。そしてここにフェミニズムからみて問題が生じるという。織田の論点は、優れた文学において、現実における女性の劣位が見事に補完されるのであれば、優れた文学は女性の現実の姿をまったく描写し得ないではないかというところにある。「一方をとればリアリズムに反し、他方をとればイーザーの補完性(または否定性)理論に反する」(一〇三頁)のである。それは文学とは何かに繋がる問題であり、織田はその原因を、イーザーが「文学が見つめている事実および真実は、二重の事実と真実なのだということ」(一〇四頁)に気づいていなかったことによると指摘する。フェミニズムの視点によれば「女は重要であって重要でない」(同上)ということが抜け落ちていくのである。そこで織田はウェーバーを援用する。リアリズムに関しては、ウェーバーから「ありのままの事実を見る科学の義務と、みずからの理想のためにつくす実践上の義務とを果たすこと。この二つをわれわれはいつもかたく身につけていきたいとおもう(ウェーバー、九―一二頁)」という箇所を借りてきて、「文学に描かれた女性像を問題にするとき、(中略)文学は「あるがままの事実」として社会的劣位にある女性の姿を描いてかまわない」(一〇九頁)」という論理を導いている。織田の以上の説明から本稿が欲しいのは、女として読むことと書くことから生じる女の二重の意識に関する説明である。十分に分かり易いとはいえないが、「読書行為における主体の分裂」、「読者と現実との関係における否定」(イーザーの補完性理

論における第二の否定)、^二「二重の事実と真実」、^一「女は重要であつて重要でない」、ウエーバーの「ありのままの事実を見る科学の義務と(中略)理想のためにつくす実践上の義務」という言葉を引きだしてきたところで本稿は、一応女の二重意識のしくみと背景への説明が得られたものとして目的を達したことにしよう。

次に佐多の評論集の分析に移ることにしよう。ここでは佐多の作品は評論集に限らず、女性作家が置かれたあるがままの現実を内容とするものが多い。佐多の小説や評論集が女性作家のさまざまな困難な現実をリアルに伝えていることは、佐多がプロレタリア・リアリズムにより作家としての出発を果たしたことによると考えられる。「プロレタリア・レアリズム」の提唱者である蔵原惟人は、「我々はこの執拗な事実―現実の中から真に革命的なものを見出してこなければならぬ。まず執拗な現実―事実から出発すること―これがプロレタリア・レアリズムの第一の要求である。」(「再びプロレタリア・レアリズムについて」、『現代日本文学大系五四』、三二―五頁)と唱っている。プロレタリア文学運動は人間の解放を目指すものであったが、その理論によって、佐多は自己のアイデンティティに基づいて、女・女性作家について度々語ることになるのであろう。佐多は、妻・母・社会主義者・文芸家としての成長を遂げるにつれて、妻・母の意識とプロレタリア作家の意識の二重の意識に分裂している自己を次第に強く意識するようになる。ロマンティック・ラブをも内面化した佐多は、とりわけ妻の意識と文学者の意識の相克が強く、その二重の意識の内面的葛藤に翻弄される姿を描いた作品が『くれなゐ』(注^一)で

ある。長谷川啓は、「女性文学にみる抵抗のかたち(左翼系作家)の父権制とのたたかい」において、佐多稲子の『女性と文学』および宮本百合子の『婦人と文学』を取り上げて、「昭和十年前後」以降の女性文学の動向を解説し、フェミニズムの視点をとり入れて佐多の作品を論じ、「対体験、母と子、女の性について、男性社会における女性の抑圧状況を、この時代に佐多稲子はいかに凝視し、告発しつづけているか」(同上、一七三頁)を分析している。百合子の『婦人と文学』(注^二)の基礎になる部分は一九三九年から一九四〇年十月にかけて発表されたものであることから、もし百合子が、海外のフェミニズム批評の先駆的作品であるヴァーヅニア・ウルフの『私だけの部屋』(注^三)を原文で読んでいないとすれば、百合子のフェミニズム批評の独自性がうかがわれる。『私だけの部屋』の発刊は一九二九年であり、日本語訳の発行は一九四〇年十一月である。佐多の『女性と文学』の発刊は一九四三年の発行であるが、そこに所収された「地肌の真実」(一九三五年九月、「都新聞」)、「女らしさ」(初出については長谷川啓によると「女らしさの問題」(「ホームグラフ」三九年七月一日)を改題したものと推定)とある)、「もの言わぬ女」(一九四〇年二月、「都新聞」)は、フェミニズムの色合いの強い作品であるが、いずれも『私だけの部屋』の日本語訳が出る前に書かれている。特に、「地肌の真実」は『婦人と文学』以前に発表されているのであるから、佐多の独自のフェミニズム観が示されていると言えよう。「地肌の真実」で佐多は、女性作家の困難と二重の意識を次のように語っている。

作家としての生活以前に、女としての生活が彼女たちを摩擦する。(中略) 作家の仕事の過程に、女の持っている弱いもの、おくれたものを始終意識し、それとのたたかいを経験しなければならぬ。また言いかえれば常に我身をマイナスとしての女の規範から引き離していなければならぬ。作家は女の生活の今日の様相を単に外的な条件においてだけでなく、自分自身の内部に気づかせられる。それ故にこそ辛いのではないだろうか。(『全集第十六巻』、一一八頁)

佐多は、女性作家には外的条件の困難はもちろんあるが、それ以上に辛いのは内面的葛藤であるという。ここで一旦目を転じて海外のフェミニズム批評家が、女性作家の困難な外的条件についてどんな指摘をしているかを見よう。ミシェル・バレットのマルクス主義的フェミニズムは、「男女が文学を生産するときの条件が物質的に異なっていて、それが男女の書く作品と内容に影響する」(『ラマーン・セルデン』、『現代文学理論』、二四〇頁)と分析する。フェミニズム批評の先駆者ヴァージニア・ウルフは物質的性差については、女性作家は自分専用の部屋と年五百ポンドのお金が必要だという(『私だけの部屋』一六五頁)。又、ジュリア・クリステヴァは母性について次のように述べている。

社会は、ひとつの存在がひとつの部分(芸術家か母か)になるのではなくて、こうした異なる複数の役割の中で居心地よくしていることをなかなか許そうとはしないものです。(中略)もし女がこのように母性と芸術家の仕事との両方を経験

すれば、女はトータル化していく「女神―母」になるどころか、むしろ、傷つきやすい場、自己自身と言語との問い直しをする場になるでしょう。(『女の時間』、一一二頁)

佐多も女性作家の外的条件の困難を挙げないわけではない。「子どもとペン」と題する短文にそれが述べられている。「私は今、四歳と二歳の子どもがある。―婦人作家なのだ、子供も生まれるだけ生んで、育てて、そして作品も書いてやろう、―私はそう思ったのだ。私は子供を抱いて書き、子供を負うて書いた。(中略)時間的に、肉体的に、母親の生活は婦人の成長をはばんでいる。

(中略)勉強の時間が少く、書く時間が少く、(中略)私は追いつてられないように子供を寝かしつけ、ペンを握る。と、朝から一日中、子供二人に引きずり廻された身体が、がっかりと肩を落して、私の頭はいつかもうろうと眠くなるのだ。'(『全集第十六巻』、一八一頁)。しかし、佐多は母性をあまり負担と感じていなかったようだ。「私はかつて一度も、子供を生むものとしての女性を不幸だと思つたことはありません。赤ん坊を生むことは大好きで、母親の幸せ、母親の美しさ、母親の徳については、私もそれを主張する一人です。'(『日々の伴侶』、一九七頁)という言葉に示されているように。そしてそれにつづけて「仕事をしてゆく女の不幸」について、「一番の不幸は、女の生活が狭いこと、そして、それ故に女自身が危ういことです。つまり自分が女だということにかかわらずことです。」と書いている。長谷川啓は「女性文学の領域で起きている〈女らしさ〉への回帰現象」(『女性文学にみる抵抗のかたち〈左翼系作家〉の父権制とのたたかい』、一六

五頁)への佐多の警告を中心に、ジェンダー概念に注目した分析を行っている。本稿は、長谷川啓が強調していない女性作家の「狭さ」についてさらに論を進める。佐多は「女の人が文学へ志して、自分の生活をそれに向けて一筋に漕いでゆく、ということはずい分大変なことだと思う。」というが、それは女の生活が「狭い」からであって、その「狭さ」についての佐多の説明を次に二つ続けて引用する。『女性と文学』からの言葉と、さらに詳しい説明として『全集第一六卷』からの言葉の両方を少々長くなるが引用する。

文学という芸術の仕事が生活とからみ合っている、という意味では男の作家も女の作家も変わりはないが、それ以前に、女にはもつと低い意味で人生に摩擦を受けなければならぬ宿命を負わされているとも言えるのではないかしら。才ある人も生活の狭さに閉じこめられてしまう。あるいは芸術生活の激しさが彼女を押し流してしまふ。芸術生活にたづさわる女の人で、女の身の辛さと小ささを感じない人は一人もないだろうと思う。(『女性と文学』、六九頁)

実際、文学の上で、男の書く作品、女の作品と別にあるわけではないのだが、女の作家が、女なるが故に自分の生活に貧しさや狭さを感じなければならぬのはどうにも仕様がなない。兎に角すでに一人の作家として社会に立っていながら、やはり男の作家に比べると、女の作家の生活は狭い。これはただ女が家庭内のことも受け持たねばならぬ、とか、子供も

育てねばならぬとか、そういう問題だけではない。つまり社会的に狭い。自分自身の気の持ち様、生活のすすめ方そのものにそれが現れる。(中略) 男の作家たちの、若い時の経験を聞いていても、実に羨ましい。例えば自分の二十歳前後と男の二十歳前後を比較してみると、(中略) 男である彼らの生活は、実に豊かである。豊かであるというのは、いろいろなことをしている、というのではなくて、その生活の内面的なものが高く、複雑で、それでいて、若さに満ち満ちていて美しい。つまり、文学的にいって、女であった私たちの生活よりずっと豊富で高いのである。(中略) 全体として(女は(筆者注) 男のような、自由な若さを呼吸していなかったことに気づく。(『若い日の経験』、『全集第一六卷』、三〇二〜三〇三頁)

女の生活の「狭さ」についての佐多の分析を通して佐多のジェンダー的な現実の捉え方と女性作家観がわかる。佐多は、生活の「狭さ」という「婦人の特質」は、「複雑多様な現実の中から真実なるものを掴み取ってそれを芸術に形象化するという逞しい文学の仕事」(『女性と文学』一七四頁)にある女性作家にとって「恐ろしい」ことであると述べている。「狭さ」についての佐多のメッセージからは、当時のジェンダー観を内面化した姿とそれを凝視するもう一人の作家としての佐多が伝わってくる。一方、文学については、佐多は性別を余り問題としない様子も見られる。作家になる前の佐多には、文学に対して、性別にこだわらない全面的な信頼があったことが述べられている。「文学という

仕事の性質は、女である、ということや、貧乏であるということや、その他の複雑な社会的な窮屈さから独立したものであるように見えたのである。文学は認められた高いレベルを持っていて、そこには、絶対の自由がある、と思われた」のである。この文学に対する性別を越えた信頼は、漱石や芥川などの男性作家の作品による男の視点の内面化現象とも指摘できる。佐多がいかに読書を糧として自己を育み、男性作家たちの作品を読むことで男の価値観を内面化し、文学を高く位置づけて憧憬していたかは、佐多の読書歴に関する幾つかの文章が伝えるところである。

4

2と3においては佐多のフェミニズムとジェンダー観の分析を行った。その結果、佐多のフェミニズムは、女性の性差のある現実をリアル捉えているものの、女性の視点に捕らわれず、つまり、女性の視点に終始することなく男女両性の関係性への模索へと向かう思考の流れと、中立的な特徴を帯びていることが捉えられた。また、女・女性作家という二つの佐多のアイデンティティから語られるメッセージを分析した結果、佐多のジェンダー的なもの見方が捉えられた。それは、時代の「女らしさ」を強く内面化した姿と、それを厳しく凝視する作家の眼として。最後にここで、佐多のフェミニズムを決定づける要因について考察したい。論中でも既に示唆したことではあるが、ここでさらに補足しまとめてみたい。結論を先に言ってしまうと、佐多稲子のフェミニズムの

決定要因の主なるものは、一 プロレタリア文学理論のリアリズム、二 プロレタリア作家として出発したことにより、現実の把握のしかたと世界観に弁証法的唯物論の影響を受けたこと、三 漱石などの男性作家の読書によって自己形成をしたこと、四 白村的な恋愛観の内面化、五 生い立ちによってより強められたと思われる自己抑制的な性格、などである。これらの決定要因の根拠をさらに補足するならば、一については、「このプロレタリア文学運動の意義が私には個人的なこととしてではなく大きく思われた。が、自分の表現を持ち得たということでは云えば、私自身にとってもその意味は深い。」(『全集第一巻』あとがき、四二七頁)という佐多の言葉が何よりも証になる。佐多がプロレタリア文学運動で得た表現とはプロレタリア・リアリズムであり、「創作に於ける唯物弁証法的方法」(『全集第一六巻』)である。(創作に於ける唯物弁証法的方法とは、「あるがままに」ではなくて、あるがままの現象を通じて、その起った必然をその本質へ入って説明する方法である。)(同上、五二頁)。一と二の両方に関係する弁証法についての説明を『現代文学・文化批評用語辞典』に求めると、マルクスはヘーゲルの弁証法の図式を採用したが、「ヘーゲルの弁証法概念の重要な点は、矛盾と否定という機能を導入したことである。ヘーゲルにとって、思考は、矛盾によって進行し、それぞれの思考には、その否定が見つけられる。テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ(定立・反定立・総合、正・反・合)さらに、そのジンテーゼ自身も次はテーゼになる」という。この弁証法の図式を、佐多のフェミニズムの特徴に当てはめてみると、女の視点・男の視点・両性の関係性という図式とその思考の流れ

に似通うものがある。佐多のフェミニズムに一貫して弁証法的な思考図式の片鱗が認められるとすれば、佐多の文学にはプロレタリア文学理論の基本的な枠組みが残っていたことにもなる。最後に、佐多における読書の影響について説明を加えよう。佐多と読書の密接な関係は、『女性と文学』の「私は何と、いつもいつも書物を文学を、無二の道づれとしてきたことだろう。」(四三頁)という言葉が端的に物語っている。そして、佐多の「文学的故郷」を考えるならば、場所としては小石川、本郷へんであり、文学では夏目漱石が挙げられることを次のように書いている。

電車が小石川から本郷へと坂を登り始めるや、私はそわそわと胸をふるはせてしまふ。このことの疑問は長いこと私から去らなかつた。そして私はある時突然、全く何のつながりもなしに、その電車の中で、夏目漱石を思ひ出した。私の胸の波立ちがすると、「三四郎」やそのほかの漱石の作品の中へとけ込んでゆき、私は目を見開いたのであった。石段のある寺は誰かの小説の中にある。格子戸の二階建ての長屋も、櫓の木に下宿屋の布團が欄干に干してあるのも誰かの小説にある。私の子供の頃読んだ小説は何と小石川、本郷へんが多いのであらう。何かもの悲しく、鋭敏になり、沸々とわきあがる感情のあったのは、みんなこれらの作品の余韻なのである。私の文学的感情が、小石川、本郷の雰囲気をもつてやしなはれてゐるのだ。(同上、六〇七頁)

漱石はその家父長制というフェミニズム批評のテーマから度々

分析の対象とされる作家であるが、読書によって得た漱石の影響がいかに深いものであったかがうかがわれる。女性の視点を十分に含みながらも、一方に偏らない中立的で、両性志向型の特徴を帯びた佐多のフェミニズムは、男女共同参画社会を目指す現段階の私たちにとつても、意味あるものと言えよう。男性にとつても、女性にとつても、参考になるメッセージを含んでいると考えられる。今後さらに、佐多稲子の作品と人生が伝えるメッセージに、耳を傾けていくことにしたい。

【注】

(1) 『くれなゐ』は、佐多稲子の代表作の一つで、『全集』では第二巻に収録されている。初出は、一九三六年一〜五月まで「婦人公論」に連載され、最終回は、「晩夏」と題して一九三八年八月に「中央公論」に発表された。

(2) 『婦人と文学』の基礎となるものは、一九三九年から一九四〇年十月にかけて「中央公論」、「改造」、「文芸」に発表された。戦後これを整理、補筆し、『婦人と文学』(実業の日本社、一九四八年十二月)として刊行された。重版のときごくわずかの章句について改訂した。『宮本百合子全集第八巻』(河出書房、一九五二年十月) 解題、参照。

(3) ヴァージニア・ウルフ 西川正身・安藤一郎訳 『私だけの部屋 女性と文学』(新潮社、一九五二年六月)。尚、最初の日本語訳は同じ訳者によって、青木書店の『文化叢書十三巻』(一九四〇年十一月)に収録されている。最近の日本語訳としては、川本静子 『自分だけの部屋』(みすず書房、一九九九年三月)

がある。

【参考文献】

- 大江健三郎 「フェミニズムの文体」 『小説の経験』 (朝日新聞社、一九九四年十一月)。
- 長谷川啓 (三卷責任編集) 『〈転向〉の明暗―昭和十年前後の文学文学史を読みかえる3』 (株)インパクト出版会、一九九九年五月)。
- 『群れ翔ぶ―佐多稲子追悼集』 (婦人民主クラブ、一九九九年十月)。
- ベティ・フリーダン 三浦富美子訳 『新しい女性の創造』 (大和書房、一九六五年)。
- ケイト・ミレット 藤枝滯子・加地永都子・滝沢海南子・横山貞子 共著 『性の政治学』 (ドメス出版、一九八五年二月)。
- 江原由美子 『フェミニズムのパラドクス』 (勁草書房、二〇〇〇年九月)。
- 大越愛子 『フェミニズム入門』 (筑摩書房、一九九六年三月)。
- ジョン・W・スコット 荻野美穂訳 『ジェンダーと歴史学』 (平凡社、一九九二年五月)。
- ジュディス・バトラー 竹村和子訳 『ジェンダー・トラブル』 (青土社、一九九九年)。
- リユース・イリガライ 棚沢直子・小野ゆり子・中嶋公子訳 『ひとつではない女の性』 (：勁草草書房、一九八七年)。
- 横田耕一 「性差別と平等原則」 『現代の法Ⅱ ジェンダーと法』 (岩波書店、一九九七年八月)。
- D・スペンダー れいのるず 秋葉かつえ訳 『ことばは男が支配する 言語と性差』 (勁草書房、一九八七年三月)。
- 小林裕子 『佐多稲子―体験と時間』 (翰林書房、一九九七年五月)。
- 織田元子 『フェミニズム批評 理論化をめざして』 (勁草書房、一九八八年一月)。
- 『現代日本文学大系 五四』 (筑摩書房、一九七三年一月)。
- ラマーン・セルデン 栗原裕訳 『現代文学理論』 (大修館書店、一九八九年七月)。
- ジョゼフ・チルダーズ & ゲリー・ペンツイ 杉野健太郎・中村裕英・丸山修訳 『現代文学・文化批評用語辞典』 (松柏社、一九九八年三月)。